



昭和小だより



季節の変化を表す「二十四節気」では、立秋が過ぎ、処暑を迎えましたが、日中の暑さが、秋の訪れを遅らせ、まだまだ厳しい暑さが続いています。長い夏休みが終わり、子どもたちの明るい声が学校に戻ってきました。登校してきた子どもたちの表情には、それぞれの家庭で過ごした時間の充実感や成長のあとが感じられます。夏休み中、ご家庭での温かな見守りとご支援をいただき、大きな事故やけがもなく、全員が元気に2学期を迎えることができましたことに、心より感謝申し上げます。

昭和地区夏まつり

8月2日に昭和地区夏まつりが、昭和小学校で開催されました。運動場の真ん中には、やぐらが立てられ、やぐらを中心に提灯を取付け、風情のある夏まつりでした。また、昭和婦人会の皆さんのが踊りをリードしてくださいり、参加者みんなで「昭和音頭」や「一合まいた」「ジェンカ」を踊りました。飛び入り参加もでき、子どもたちと一緒に楽しく踊りました。バザーやキッチンカーも出店し、大勢の人たちで賑わいました。そして、花火大会があり、生子山山頂から打ち上げられる花火は、迫力があり圧巻の美しさでした。最後には、抽選会もあり大盛り上がりでした。

昭和地区夏まつりは、地域のつながりや絆を深めるものとなります。子どもたちにとっても、普段とは違う経験となり、夏休みの楽しい思い出となりました。



戦場カメラマン・ジャーナリスト 渡部 陽一 さんの講演から学ぶ

戦場カメラマン・ジャーナリストである渡部 陽一さんの講演を聴く機会を得ました。講演では、渡部さんの独特なゆっくりとした口調と穏やかな語り口で、とても丁寧に優しく語りかけてくれました。

渡部さんは、大学時代、アフリカの狩猟民族に興味をもち、コンゴ民主共和国を訪れた際にルワンダ紛争に巻き込まれ、少年兵に襲撃されるという衝撃的な経験をしました。その出来事がきっかけで、「現場のリアルを伝える必要性」を痛感し、戦場カメラマンになることを決意したそうです。現地で暮らす人々の「ありのままの表情」や「生の声」を写真とともに伝え、命の尊さや平和の大切さを語っていました。また、「戦争がなくなったら学校カメラマンになりたい」と語るほど、平和への強い願いをもっています。

今年で戦後80年という節目の年にあたります。そして世界には、今も争いや不安の中で暮らしている子どもたちがいることも事実です。子どもたちには、この「当たり前のように思える平和」に感謝する気持ちと、身近な生活の中で「相手を思いやり、優しくする心」を育んでほしいと願っています。2学期は、多くの学校行事があり、仲間と力を合わせ、課題に向き合い、自分の力を試す絶好のチャンスです。ときには思い通りにいかず悩むこともあるかもしれません、そうした経験もまた、子どもたちを成長させる大切な糧となります。